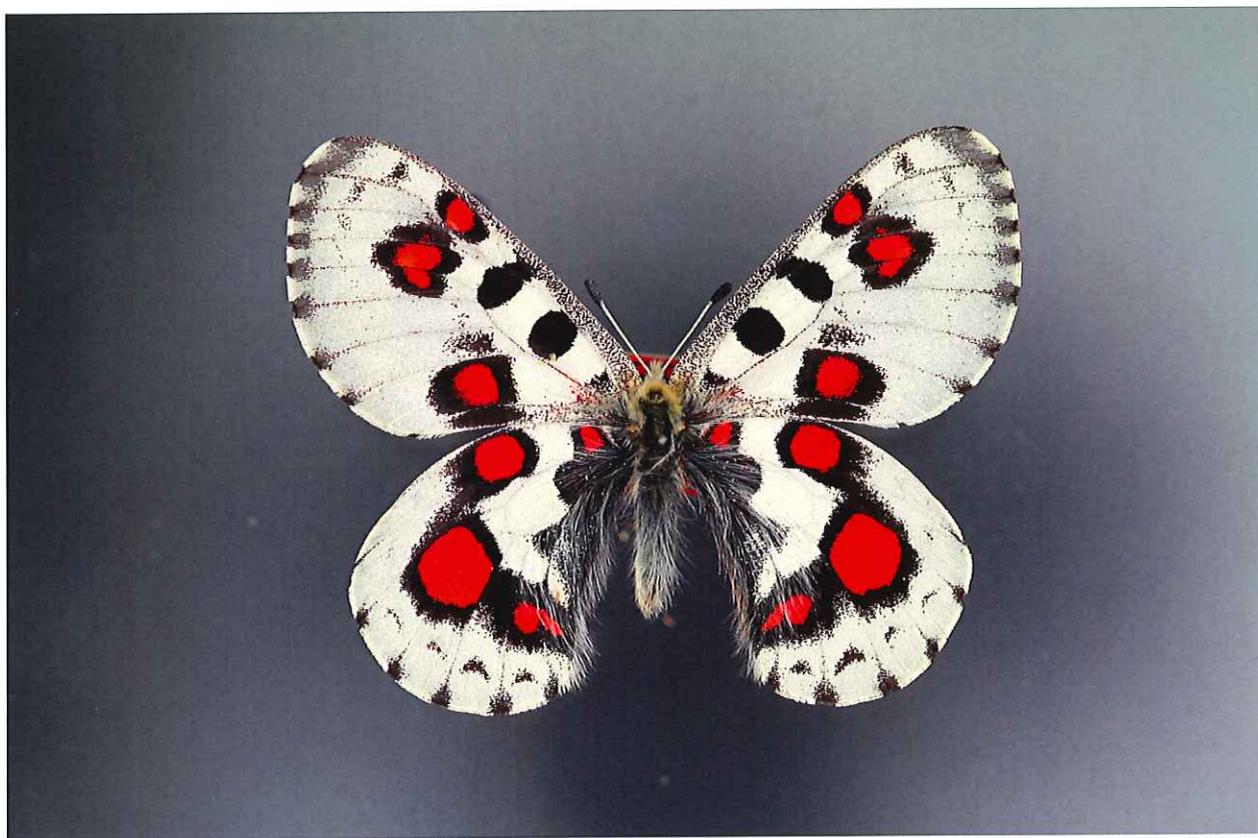


日本鱗翅学会中国支部会報

第14号



Parnassius nomion koiwayai Ohya & Inomata, 1988

2013年10月

日本鱗翅学会中国支部

日本鱗翅学会中国支部規約

2001年12月2日制定, 2005年11月26日改正

第1章 総則

(名称)

第1条 本支部は日本鱗翅学会中国支部と称する。

(目的)

第2条 本支部は支部会員相互の交流を図り、鱗翅目昆虫についての理解を広めることを目的とする。

(事務局)

第3条 本支部に事務局を置き、事務局を本支部の所在地とする。

(事業)

第4条 本支部はその目的を達成するために次の事業を行う。

- (1) 年1回例会(総会を含む)を開催する。
- (2) 年1回日本鱗翅学会中国支部会報を発行する。
- (3) その他、適当な行事を行う。

第2章 支部会員

(組織)

第5条 本支部は中国地区(広島・岡山・鳥取・島根・山口の各県)に在住する日本鱗翅学会会員をもって組織する。

(義務)

第6条 本支部の会員は住所(連絡先)、氏名などに変更のあるときは遅滞無く事務局に通知するものとする。

第3章 役員

(種類)

第7条 本支部に次の役員を置く。事務局は支部長、事務局幹事、会計で構成する。

- (1) 支部長 1名
- (2) 事務局幹事 1名
- (3) 幹事 4名
- (4) 会計 1名

(選出)

第8条 支部長は日本鱗翅学会中国地区選出の評議員の中から互選し、総会において承認を得るものとする。幹事(事務局幹事を含む)は第5条の各県の会員の中から推薦され(1名ずつ選出。自薦を含む)、総会において承認を得たものとする。選出方法は各県の裁量による。

事務局幹事は原則として支部長在住の県から選出された幹事がこれを務める。

会計は支部長が会員の中から推薦し、総会において承認を得たものとする。

(職務)

第9条 支部長は本支部を代表し、支部会務を統括する。支部長に事故があった場合、支部会員の資格を失った場合は、当該年度内の残任期間に限り他の評議員が支部長の職務を代行する。この場合総会の承認を必要としない。

事務局幹事は支部長を補佐し、支部運営上必要な業務を行う。

幹事(事務局幹事を含む)は例会の開催、会報の発行、その他支部運営に必要な業務の遂行に協力する。

会計は支部資産を掌握し、出納事務を行う。

(任期)

第10条 支部長の任期は原則3年とし、再任を認めない。

事務局幹事の任期は原則3年とし、再任を認めない。

幹事の任期は1年とし、再任を妨げない。

会計の任期は原則3年とし、再任を認めない。

第4章 例会、総会および会報

(例会の内容)

第11条 例会は原則として支部会員による研究発表、調査・採集報告などで主に構成され、必ず総会を含むものとする。

(開催地)

第12条 例会は各会計年度内に少なくとも一回おこなうものとする。

例会は広島県、岡山県、鳥取県、島根県、山口県の順で開催するものとする。

(例会の運営)

第13条 例会は前条開催地の幹事が主催する。

(総会の運営)

第14条 総会は支部会員をもって構成する。

総会の運営は事務局が担当し、議長は支部長が務める。ただし、他の評議員または幹事による代行も可とする。

総会の議決は出席した支部会員の過半数をもって決し、可否同数のときは議長の決するところによる。

(会報)

第15条 会報は例会を主催した幹事が草稿を作成、編集する。

会報は事務局が発行し、例会開催翌年の4月末までに支部会員全員に配布する。

第5章 会計

(経費)

第16条 本支部の経費は次に掲げるものをもってこれに当てる。

- (1) 支部連絡費(本部より交付) 200円/年/会員
- (2) 支部助成金(本部に申請)
- (3) 寄付金、その他

(資産の管理)

第17条 本支部の資産は事務局が管理する。

(決算)

第18条 本支部の会計状態及び収支決算はこれを総会で報告し、承認を得なければならない。

(会計年度)

第19条 本支部の会計年度は毎年1月1日に始まり、同年12月31日に終わる。

第6章 補則

(会則の変更)

第20条 本支部の会則を変更する場合は、総会の議決を経なければならない。

(委任規定)

第21条 この規約に定めるもののほか、本支部の運営に関して必要な事項が発生した場合は、評議員及び幹事との協議に基づき、事務局がこれを定めることができる。ただし、その事項は次回総会において承認を得なければならない。

附則

この規約は、平成14年1月1日から実施する。

この規約は、平成18年1月1日から実施する。

(支部例会について: 第4回支部総会申合せ事項)

2003年から、学会員500円、非学会員1,000円とする。

参加費を支払って参加した非学会員には、例会の記事が記載された翌年発行の支部会報を一部送付する。

総会開催中は会員外の者の傍聴は認めるが、発言権、議決権は認めない。

支部長挨拶

支部会員の皆様、今期（2013～2015 年度）の中国支部長を務めます田村昭夫（鳥取県）です。皆さんの期待に添えるように 3 年間全力で取組みたいと思います。初めて評議員になり、いきなりの支部長就任となりました。不安な面がたくさんあります。会員皆さんの協力よろしく申し上げます。

1974 年に鱗翅学会に入会し、29 年の年月が流れました。初めて学会総会に出席したのが 1997 年第 41 回広島大会でした。初めて学会に参加し、たくさんの講演を聞いて感銘を受けたことを覚えています。2004 年第 51 回松江大会が近くであったことから、徐々に全国大会に参加しました。これ以降今年の 59 回松山大会まで毎回総会に参加してきました。大会に参加する度に新しい情報に触れ、刺激を受けてきました。刺激を受けた情報がなかなか消化できないことが多くあります（消化するように努力するのですが）。支部例会にも、ほぼ毎回のように参加してきました。参加するたびに、中国支部の新しい情報に接することができました。会員の皆さんの忙しさの中での多大な活動に接し、毎回刺激を受け、自分も何とかしなければと総会、例会に参加するたびに思うところです。

2015 年には、中国支部が全国大会を受けることとなりました。今後 2015 年の総会に向けて取組んでいかなければなりません。会員数が少ない中国支部（現在 53 名）ですが、皆さんの援助を受けながら全国大会に向けて、全力で取組んでいこうと思います。

どうか会員のみさん、御協力をよろしく申し上げます。

中国支部 田村昭夫

第14回日本鱗翅学会中国支部例会の報告

毎年、中国支部例会は中国5県が持ち回りで実施しています。2012年は岡山県が担当で、11月17日(土)に岡山市国際交流センターで開催しました。参加者は会員15名と一般参加者6名の計21名でした。活発な議論や意見交換が行われました。

研究発表・話題提供(敬称略)(*演者)

1. 「*Parnassius* の話題」:大屋厚夫

パルナシウス属には僻地や国境地帯に生息する種が多く、従来より商取引の対象とされてきました。パルナシウスの全種、全亜種の文献を揃えるのに15年かかり、収集過程で自分の作ったチェックリストを再び集める珍事もあったとのこと。美しく変化に富むパルナシウスの写真を見ながら聴講しました。

2. 「台湾採集旅行記」:吉田嘉男・若槻匡志

11名が参加した9月13日から5泊6日の台湾(埔里周辺)昆虫採集ツアーの報告を、写真とVideoで紹介されました。採集トラップやアケボノアゲハなどの生態写真とリリースの様子などを含めて日程順に成果を披露されました。また採集された標本も展示され、参加者の多くが覗き込んでいました。

3. 「山口県のイチモンジチョウとアサマイチモンジの分布域」:後藤和夫

食草(スイカズラ等)、形態の類似する両種の内、生息域が本州に限られるアサマイチモンジの南限が山口県中央部にあります。食草や気象条件、ギフチョウとヒメギフチョウの棲み分け論などから分布域拡大の可能性を探る講演でした。

4. 「山口県のフチグロトゲエダシャクの話その2」:渡邊一雄

フチグロトゲエダシャクが2007年2月、山口県宇部市にて県内初記録となった後、同好者により積極的に調査が開始されました。その一部が一昨年の中国支部例会広島例会にて報告されました。今回は飼育を含めて、採集地での個体移動調査などの生態調査の報告が加わり、時間をかけた入念な調査の一端が伺えました。

5. 「鱗翅学会松山大会の報告」:三宅誠治

松山大会の報告とそれに伴う評議員会の報告がなされました。



例会

総会は三宅誠治評議員を議長に選び、事業報告として11月1日現在の会員数57名、第13回の支部例会を広島県RCC文化センターで実施(2011.11.19, 参加者15名)し、支部会報13号(24頁)を発行した報告がありました。続いて会計報告をおこなった後、本部理事會報告の中で、石井実新会長の挨拶をビデオ上映し、来年の全国大会は大阪府立大学で開催する旨案内があった。役員改選では田村昭夫次期評議員が新支部長に選出されました。

また、来年の支部例会は鳥取県で開催することになりました(後日、11月30日(土)鳥取県立博物館に決定)。

懇親会

懇親会は会場からすぐ近くの宴会場に13名が集まり、いつもながら和気あいあいの時間をすごしました。



参加者(敬称略:順不同)

伊藤國彦, 三宅誠治, 池田真啓, 吉田嘉男, 大屋厚夫, 三熊良一, 田村昭夫, 渡邊一雄, 若林増樹, 澤野邦彦, 本田計一, 後藤和夫, 中井衛, 布目和子, 松尾泰幸, 大森斉, 大森順子, 田中正耕, 郡涼太, 奥島雄一, 若槻匡志 (報告者:若槻匡志)

お知らせ

1. 第15回支部例会のご案内

詳細は改めてお知らせします。お誘い合わせてご参加下さい。

他の予定と重ならないようカレンダーにメモをどうぞ。

○会場:鳥取県立博物館(鳥取駅から徒歩10分)

○日時:2013年11月30日(土曜日)午後1~5時

○参加費:会員500円, 非会員1,000円

2. 支部助成金

2013年度の支部助成金を2012年12月に申請し、2012年3月29日の評議員会で承認されました。39,650円です。支部会報14号の印刷費、郵送費、例会会場費などの一部に充当されます。

3. 支部会報15号の原稿を募集

2014年4月に発行予定の第15号の原稿および表紙写真を募集します。

書評・論文紹介・紀行文・近況などの軽い読み物をお寄せください。

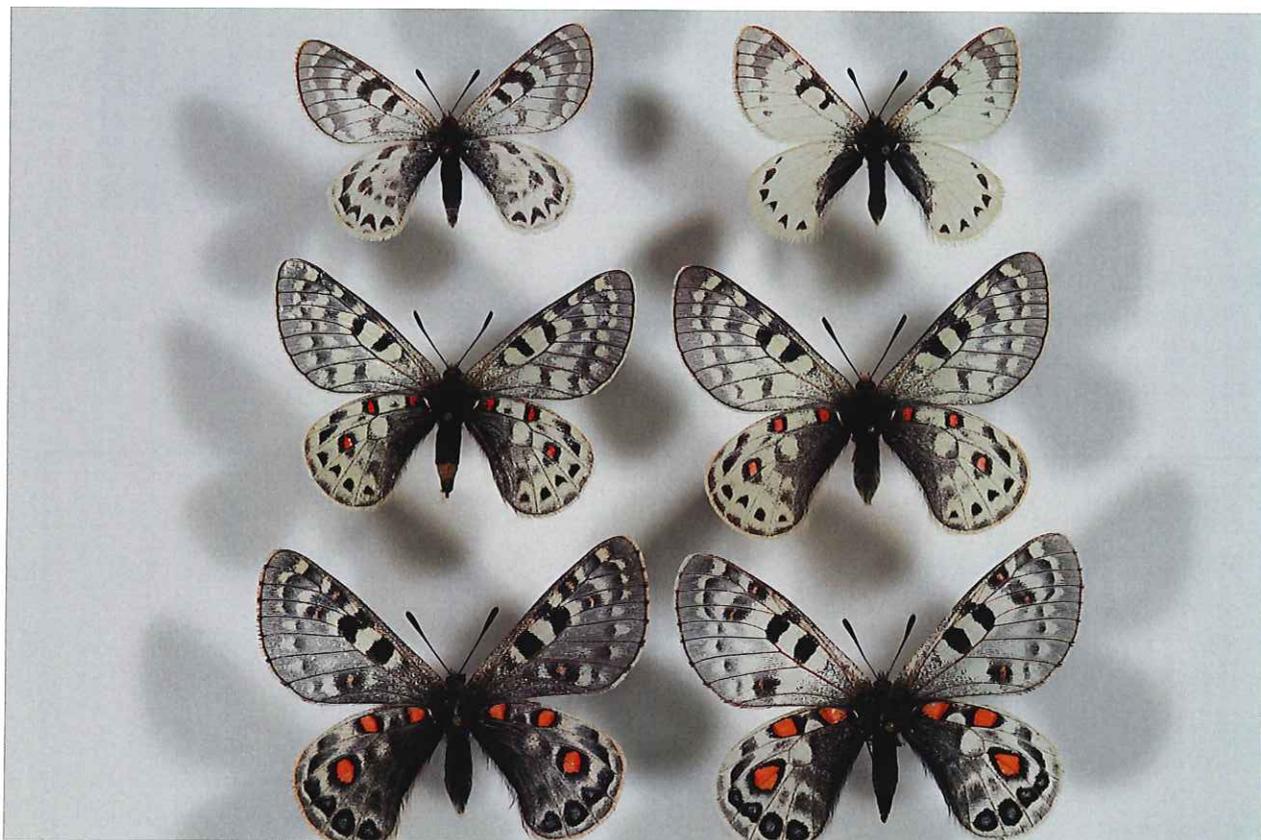
Parnassius 属の分類事始め

大屋 厚夫 (岡山県)

Parnassius の分類に執着? した H.Bryk や C.Eisner, それに O.Bang-Haas は 1930 年代に活躍した学者, 貿易商, 標本商であったが, 彼らは何かに憑りつかれたように分類した。分類した人は彼ら 3 人だけではなく, 昆虫学者もいたが, コレクターなど職種はさまざま, 多岐にわたっている。

なぜそうなったのか? その原因は *Parnassius* の独特の変異の幅が広いためと解釈されるが, 本当の理由は以下に述べることに尽きるようだ。

まず, 標本の入手経路に秘密があり, 滅多なことでは手に入らなかったことである。まず *Parnassius* 属のほぼ全種は棲息域が特異で, いわゆる高山蝶である。それも 4000 超える高度にあり, 簡単な装備では採集は難しい。さらに棲息地周辺は国境付近にあり, 常に紛争地帯であったこと。しかも国境は大山脈の稜線が多く, 中国, チベット, インド・パキスタン, 旧ソ連邦 (現パミール), アフガニスタンなど現在でも紛争中の地域が主要産地なのである。*Parnassius* の生息地は天山, ヒマラヤ, 崑崙, ヒンズークシュ, パミール高原の山々の国境地帯とほぼ一致していて, 容易にそこに入域できなかつたことが珍品の理由である。



上から *P.hunnyngtonii*, *P.acco*, *P.przewalskyi*, 左♂, 右♀

1930 年代に *Parnassius* を入手することは極めて難しく, 大規模な山岳遠征隊などに資金を投入して, その見返りに得難い高山蝶を入手したようであった。

したがって, 財力はもちろんのこと, 山岳隊とのつながりがなければ標本を入手することは不可能であった。素人の山岳隊員が採る標本は数が限られていて, 採集者が三角紙にきちんと収めたようなものではなかつたであろう。貴重な標本を難しい入手条件を満たした者だけが記載することができたのだ。結果的に当時を代表するような分類学者, 標本商, 貿易商であったのであろう。

さて、こうした少ない標本は採集された地域とは無関係に、ことごとく命名された。同じ場所から数年後に別名で記載されることもあったのだ。それは *Parnassius* 属の全体像が把握できていなかったことであろうが、その他に「命名競争」が拍車をかけたと思われる。

まず、Bryk のような分類学者は一種でも多くの新種、新亜種を命名したいであろうし、Einer のようなコレクターであればコレクションの質を高めるために1種、1亜種、1formでも多く模式標本がほしかったであろう。

2人の思惑と利害関係は一致したようで、Bryk & Eisner の命名はとても多いのだ。中国の奥地に独自のルートを持っていたと思われる Bang-Haas は単独で記載した。入手できた標本は同じ山塊はもちろんのこと、同じ場所から採れた標本に差異を見出したら無差別?に命名された。

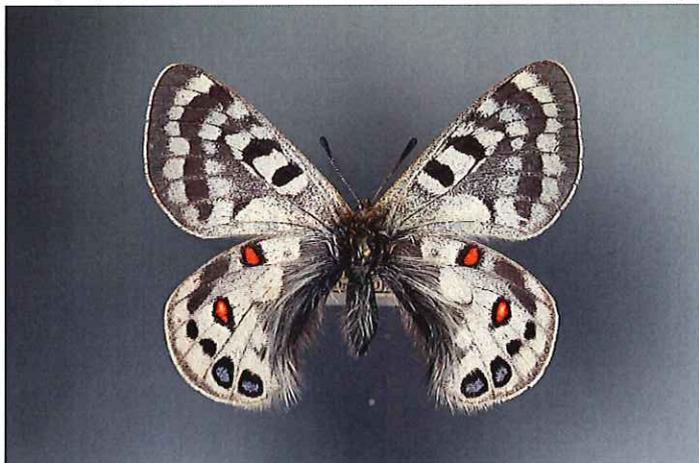
とくに標本商 O. Bang-Haas はタイプ標本は破格に高価であったので、珍品の *Parnassius* は高額で取引されたのである。富も名声も得ることができ、そして売り手はもちろんだが買い手(コレクター)も「幸せ」であったのだ。

現在、*Parnassius* の分類をする人は、この時代に残された膨大な資料 *Parnassiana* とか *Parnassiana Nova* だけでなく当時の古地図や記載文献などを分析する必要があるのだ。

私は1978年代からチェック・リストの作成を始めた。最初の参考資料は小出雄一著(ニューサイエンス社)の簡単なものであった。

この中に、*Parnassius cephalus dalailama* というのがあり、この種の最大の大きさで、タイプ産地は Atunze (四川省とチベット、雲南省の境界)。しかし、この原記載はなかなか手に入らなかった。大原農研に出向いて出典を探したところ、北海道大学の図書館が唯一保存していたので、まるごとコピーをお願いしたところ、まるごとコピーはできない旨の連絡があり、最初は前半の150頁をコピーしてもらった。しかし、この中には記載文は見つからず、コクゾウムシのような研究論文であった。引き続き交渉して、最後から50頁をお願いしたところ、しぶしぶと応えて貰ったが、ここには蝶の論文はなく、3度お願いして、残りの15頁を送ってもらい結果的にまるごとコピーになったので、これは複製本に当たり違法なので、どこか公共機関に寄付をしてほしいとの依頼があった。

そんなことはどうでも良かったが、残りの15頁は確かにパルナシユウスの記載があった。しかし、小出氏が書いていたダライマ「*dalailama*」という意味不明なものではなく、あの



Parnassius cephalus dalailama

「*dalailama* ダライマ」に献名されたものであった。間違いの出典は Bryk のカタログであったが、この間違いに懲りて、先に進めないので私は自分ですべての原記載に当たろうと思ったのだ。

原記載は図書券を買い求め、大英博物館からのズーロジカル・レコードを引き、ここから種、亜種の記載を知り、原本に当たる手順であるが、この作業は気の遠くなるような根気が必要で、容易ではなかった。

チェック・リストは、記載本に示された種、亜種の正確なスペル、それに基産地を

地図上に書き記すことである。

この作業は1930年代のヨーロッパの地図を複数入手することが必要で、地図の入手は記載文献と同じように重要なことである。この作業は困難を極めたが、基産地を探し出すには、等圧線が細かく書き込まれたアメリカン・アーミーの五万分の一地図の中から、虫めがねでやっと見えるほどの細かい字を読み取り、仕事の合間(当直の夜中)に、丹念に基産地を探し、タイプ産地を割り出した。たとえばカシミール地方全域であれば、8畳一間になるほどの大きさになり、たとえば ThumThumThang という場所を隅から隅まで探すのであるが、最後まで分からないこともあり、記載地を見つけ出すのに一年間に2~3ヶ所見つければ満足した。

こうして、チェック・リストを15年かけて完成したが、欲しいと言う人に差し上げたら、瞬間に私のところに“チェック・リストがあるので買わないか？”との連絡があり、自分の調べた結果と差があるのか興味があったので、これを手に入れた。しかし、このリストは私が作成したものであった。本来、こうしたチェック・リストなどは誰が作っても同じ結果になるものであろうから、せめてご苦労さんの意味を込めて、自分が作ったという印、つまり現実には記載されていない亜種を数か所、リストの中に紛れ込ませておくのだ。誰が作っても全く同じものではないように、きちんと意思表示をしておくべきだと思ったのである。

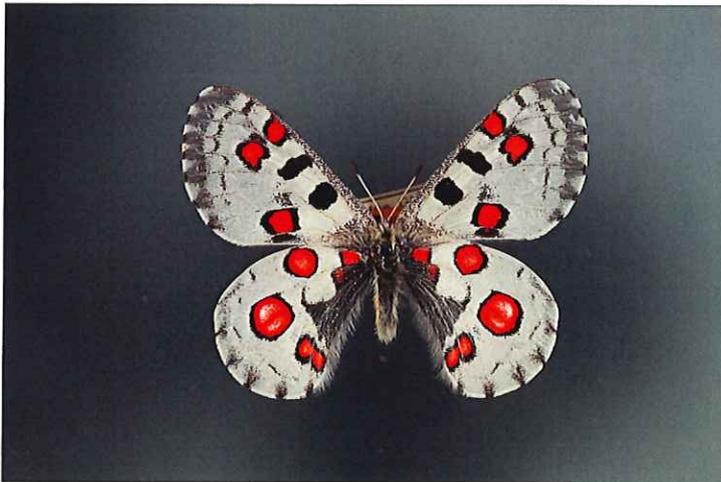
現在も進行中であるが、月刊むし社から「世界の重要昆虫、Parnassius 編」にこぎつけたのである。現在は日本蝶類学会（フジ）に最新の分類を記載しながらこのシリーズの続編を書いている。

今回は同じ山塊から2亜種も掲載された種の話や、パミール高原のアライ山脈とトランスアライ山脈は僅かな距離しか離れていないのに、まったく異なる顔をしたのが棲息することを簡単に解説してみようと思う。

まず、同じ山塊から2亜種採れたことは事実であるが、それは後に別種だと分かった。つまり、分類した Eisner は分類学については素人であったかもしれないが、分類センスは持ち合わせていたのだ。

アライ谷を挟んでアライ山脈とトランスアライ山脈は古い地層であることは地質学的に証明されていて、この山頂付近に棲息する種が何故行き来できないのか？何故こんなに違った形質をもっているのか？謎であるが、私は恐らく、気圧のカーテンが物理的に蝶の行き来を阻んでいるのではないかと考えている。そう説明しないとこの地域だけではなく、どうしても理解できない地域がとても多いのだ。山脈の裏と表では顔が違っているのはほぼ常識で、どうしても山頂が越えられない理由があると思うのだ。

また、Parnassius 属がお互いによく似ているのは、恐らく並行変異ないし毒チョウのために収斂した結果なのであろうか？Richthofen 山脈にいるパルナシュウスは赤紋が大きく発達し、黒い



帯状の斑紋が消失する。この傾向はここに棲むパルナシュウス全種に共通した特異な形態なので、標本を一見しただけでどこの産地のものか容易に理解できる。精通することはとても良いことであるが、同時に細かい違いも分かることになる。つまり、結果として細分主義に陥るのだ。

Parnassius nomion richthofeni

台湾採集旅行記

吉田 嘉男・若槻 匡志（岡山県）

2012. 9. 13～9. 18 の5泊6日の日程で、むし社企画「台湾」昆虫採集の旅に参加したので報告する。

9月13日、3空港（成田、名古屋、関空）より計11名の虫屋が台北（桃園国際）空港に集合した。メンバーの内訳は次の通りである。

- * 成田空港 5名 （蝶 3名、甲虫 1名、むし社 1名）
- * 名古屋空港 3名 （蝶 2名、甲虫 1名）
- * 関西空港 3名 （蝶 2名、甲虫 1名）

台北空港から2台の小型バスに乗って、台中経由で埔里（プーリー）に到着する。埔里は台湾の地理上の中心地でもあり、近くに好採集地を抱えて、古くから昆虫愛好者が訪れている場所である。



採集拠点「埔里」の位置



台北空港にて到着組を待つ



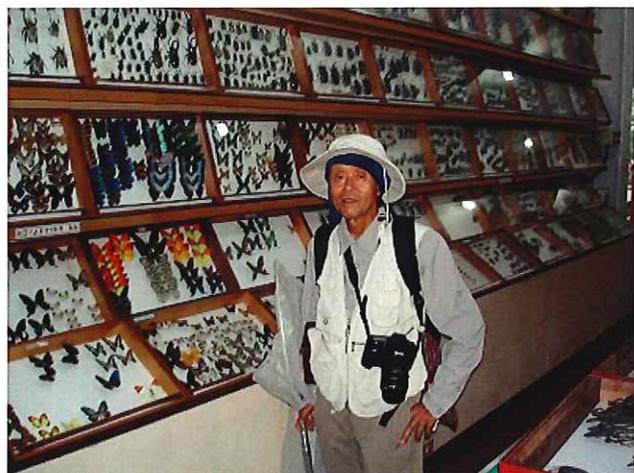
ホテルに到着

埔里のホテル（鎮寶大飯店）を拠点に次の日程・内容で採集会を実施した。

9/13 昆虫館周辺 夜間 関刀山

ホテルに到着後、今回の世話をお願いしている羅さんの経営する昆虫館に案内され付近を散策したところ、シロウラナミシジミ、ツマムラサキマダラ、キタテハなどを見る。その後昆虫館見学と隣接する料理店で夕食を摂りながらスケジュールの打ち合わせを行った。

食後は夜間採集に参加したが、発電機の不調もあって収穫は少なかった。



昆虫館を見学



夕食とスケジュールの打ち合わせ

9/14 楓林口沢 夜間 奥萬大林道

6時起床、8時、2台の車でホテルを出発、昆虫館経由で楓林口沢に行く。出発から1時間程の場所で、近くに民家や畑もある谷間の道を行き来して採集する。ルリモンアゲハ、ツマベニチョウがよく飛んでくるが訪花の時間が短くてなかなか採集できない。日本では見られないメスシロキチョウも多く、♂はカラフルで、よく目についた。

午後、谷の入り口付近の民家の空き地で10数頭のアゲハの吸水集団を見つけて写真に収める。ワタナベアゲハ、モンキアゲハ、オナシモンキ、ルリモンアゲハの集団であり、まとめて採集をしようと上からネットを被せた途端に、力が入ってネットが弾み、下側からほとんど逃げられた。その後ヒョウマダラを初ネットインする。この日の夜間採集は都合で参加しなかったが、珍種タイワンテナガゴガネが飛んで来て、撮影後やむなくリリースしたという。



メスシロキチョウ♂



アゲハチョウの吸水

9/15 奥萬大林道 夜間 本部溪谷

奥萬大林道は山の中腹外円を切り開いた林道で、今回は中腹まで登った三叉路付近で駐車した。林道はアップ・ダウンも結構あり、ペットボトルを入れたリュックとネットを持って往復しながら思い思いに採集した。ワタナベアゲハ、ルリモンアゲハは頻繁に飛んでくる。路上に静止しているコノハチョウを見つけ、しめたとばかりネットを被せたとたん、またしても逃げられた。クロタテハモドキはヒカゲチョウのように殆ど茶色一色の地味な蝶であり、林間でかなり多くみられた。

ツマベニチョウも頻繁に飛んでくるが静止することが少なく採集が難しい。林道一带はセミが多く、セミしぐれが喧しい。セミは鳴き声により4種を確認したが、そのうち2種類は日本では聞いたことがない変わった鳴き声であった。

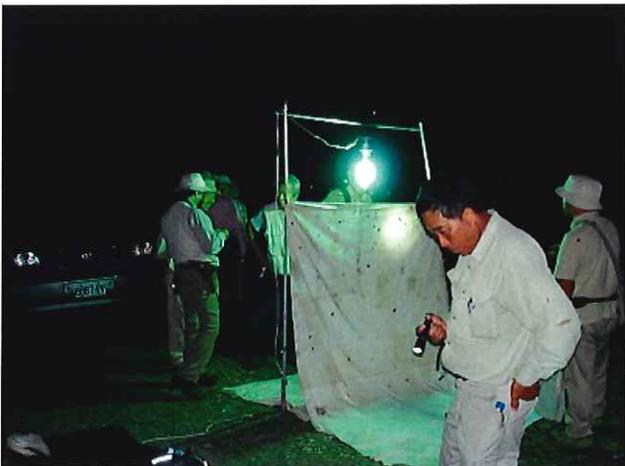
この日の夜間採集は奥萬大林道の下側に位置する本部溪谷の2か所で実施、多くの蛾類を採集した。



奥萬大林道に到着



林道の様子



夜間採集



ライトに来たハグルマヤママユ

9/16 松岡付近午後本部溪谷 夜間 南山溪谷

5時半起床、7時半にホテルを出発して霧社方面に向かった。霧社は標高千米以上ある町で、付近は観光地となっている。休日でもあってマイカーや観光客も多い。霧社を30分程過ぎた松岡付近の脇道に入った場所に駐車して付近を調査する。オオベニモンアゲハに交じってアケボノ

アゲハ♂が蝶道を回ってくるが、静止することが少なくなかなかネットイン出来ない。しばらくしてやっと1♂をネットに入れた。

アケボノアゲハは、台湾で採集禁止の5種類（フトオアゲハ、キシタアゲハ、コウトウキシタアゲハ、アケボノアゲハ、オオムラサキ）の中の種であり、表裏を丹念に撮影後やむなくリリースした。その後アケボノアゲハは1♀をネットインして撮影、1♂も葉上に静止した個体を撮影することが出来た。

この場所はホッポアゲハのポイントでもあり、長竿持参のメンバーは上空を飛び回る本種を見つけ、時々高い樹木の葉上や花に止まったところをキャッチしていた。



葉上に静止するアケボノアゲハ♂



リリースするアケボノアゲハ♀

昼前まで採集した後、本部溪谷に下り、川幅百 m もある河原沿いの路上にて昼食にする。食事でもアゲハやマダラがよく飛んでくる。さすがに蝶の多い台湾を実感する。

早々に昼食を終えて付近を回り、ホリシャルリマダラ、ウスコモンマダラ、キゴマダラなどを新たに採集する。吉田さんは俊敏に飛んで来たタイワンタイマイを見事キャッチする。



本部溪谷



崖地で吸水するタイワンクロボシジミ♂



岩場に静止するキミスジ



吸蜜中のツمامラサキマダラ♀

9/17 奥萬大林道

奥萬大林道は今回のツアーで4度も訪れることになった、好採集地である。

到着直後、トリ子のメンバーが林道沿いの木の枝にパイナップルの輪切りを1枚ずつ刺してトラップを数か所設置しているのので、トラップも見落とせない。

たまたま通りかかったトラップに来ていた赤、青、緑色のカナブンに見とれていると、運よくヒメフタオチョウが来て吸蜜を始めたので、すかさず採集することが出来た。この日はタカサゴイチモンジがトラップや路上でも多く見られた。1属1種とされているホソチョウはなかなか採集の機会が無かったが、山道沿いの傾斜地に訪花した2みをやっと採集することが出来た。



トラップに来たカナブン

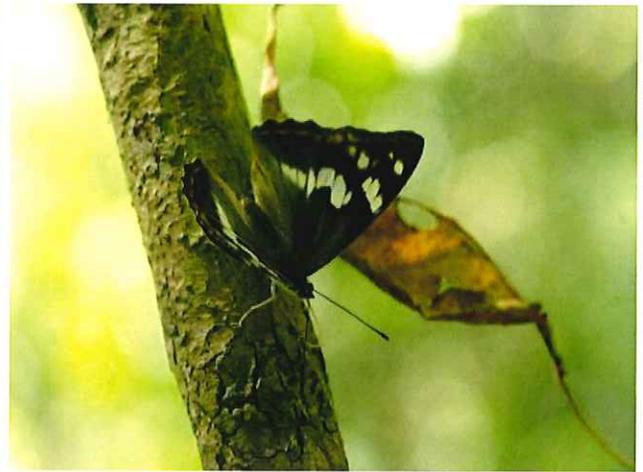


タカサゴイチモンジ

アゲハモドキは日本では黒色型しか見たことがなかったが台湾では白化型がよく飛んでいた。最終日は、夜間採集は無く、全員が無事にツアーを完了したことを祝っての乾杯のビールはこのほか美味であった。



メスチャヒカゲ♂



タイワンコムラサキ♀



タカサゴイチモンジ♀



モンキアゲハ♂



打ち上げ



集合写真

台湾付近はツアーの前（8月末）台風 14、15 号の停滞と通過があったが、期間中は全日天候に恵まれ、約 80 種類を採集することが出来た。蝶の宝庫、台湾を垣間見た旅であった。

尚、台湾採集記について、岡山昆虫談話会ホームページにて Video を挿入して報告しているので、併せてご覧いただければ幸いです。

（文責 若槻・写真 吉田）

山口県のイチモンジチョウとアサマイチモンジの分布域について

後藤 和夫 (山口県)

1. 国内での二種の分布域は

イチモンジチョウ *Ladoga camilla* とアサマイチモンジ *Ladoga glorifica* の分布域は、白水(2006)に図示されており、前者と異なり後者は、山口県の山陰側に位置する萩市から県中央部にあたる秋吉台周辺部を経由し、防府市に至るラインが両種の混成する境界域になることが示されている。

・引用文献

白水 隆(2006)日本産蝶類標準図鑑. PP. 237, 学研, 東京.

2. 山口県の行政界・主要山岳・島嶼など (図-1 参照)

図-1



3. 山口県のイチモンジチョウとアサマイチモンジの分布域 (プロット図-2)

図-2 に示す様に赤書きライン(仮称 AI ライン)から北東側一帯にかけて両種が混成している。このラインから西側(下関側)にはこれまでの調査から、イチモンジチョウのみ分布しアサマイチモンジは確認できていない。

・参考文献

五味 清(2011,2012) 山口のむし.

後藤和夫(2005,2006,2007,2008,2009,2010,2011,2012,2013) 山口のむし.

図-2

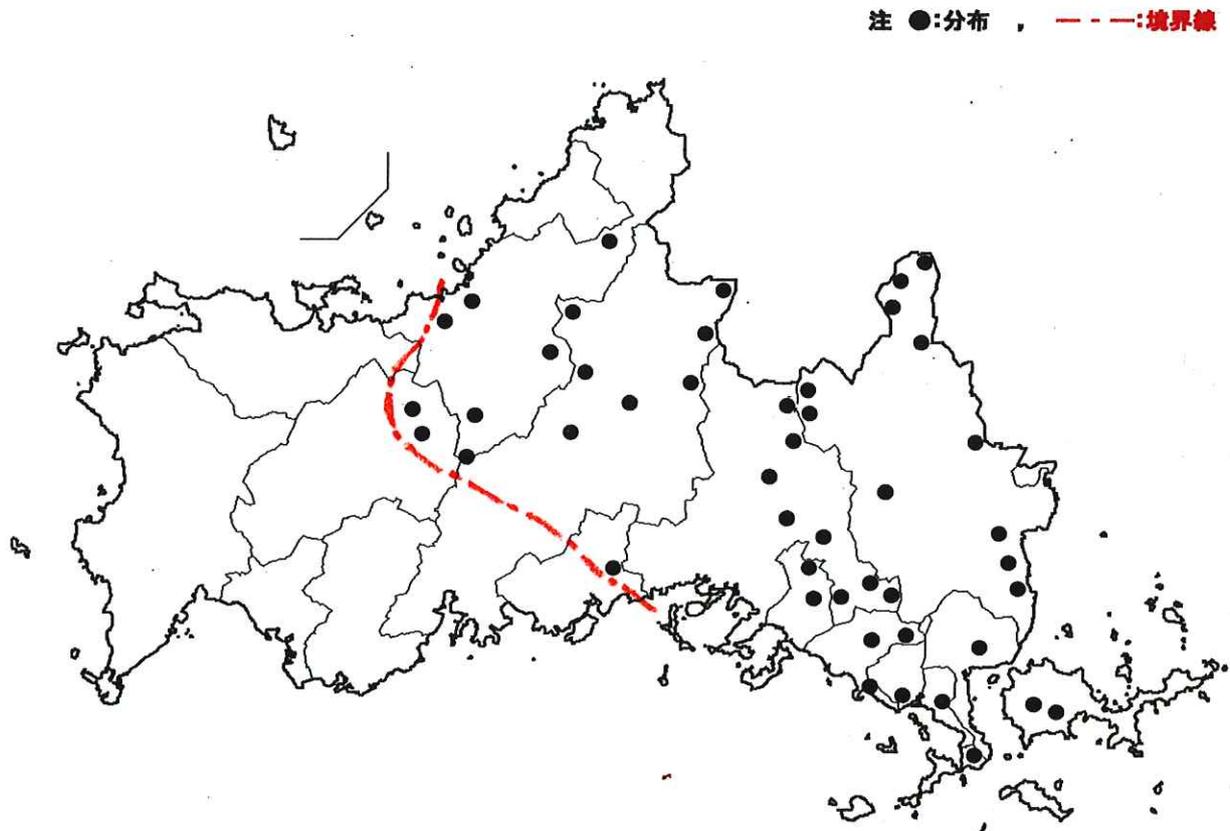


図-2 は、過去山口県内から両種が確認できている場所をプロット図化したものである。

■ 生態や分布・食草などについて

- ・西限は秋吉台の東北側となり、北部側は萩市。東側は防府市の大平山山塊部を結ぶ線上から東北部にかけて混生する。
- ・個体数は北東側になるほど多く、西側は少なくなり、その割合は概略7:3程度になると推察。
- ・食草はこれまでのところスイカズラで、他のスイカズラ科については意識した調べは行っていない。
- ・成虫は、1化は5月末から6月初め頃。2化は7月中頃から8月に掛けて、8月末から9月初めに見られる新鮮個体は3化の可能性がある。アサマイチモンジも同様に何れの時も数日遅く発生するが、意識しないとその差は分からない。

両種は棲み合うのか

- ・両種はほぼ同一環境に生息し活動、知る限り同じ食草を餌にしている。棲み分けとは見られない。

文 献

- ・中井 衛氏の 棲み分け・棲み合い の理論(2009, 2010, 2011) 山口のむし.

■ アサマイチモンジはなぜ山口県が西限となっているのか

(九州・四国に分布しない理由は)

- ・ 気象条件は？ (国内の分布域の気温の変化をデータ化して分析することの必要性は)
- ・ 食草が少ないのか？ タニウツギなどの食草に依存する両種の度合いはどうかなど、食草の関係。
- ・ 日本海と瀬戸内海に挟まれた山口県という地理的な要因は考えられるのか？
- ・ 日本固有種のギフチョウに近い分布をするのはなぜか？ 旧北区に分類されるイチモンジチョウとの違いは何か？
- ・ ギフチョウと同じような分布をすることの意味するものは？ (日本特産種と旧北区系との違いは？)

九州・四国になぜ分布しないのか

1. 東部の島となる屋代島に両種が混成するが、四国になぜアサマイチモンジは分布しないのか、謎が残る。シジミチョウ類のヤクシマルリシジミは四国から瀬戸内海を越えて、屋代島に分布した個体が柳井市や光市、岩国市の内陸沿岸沿いに拡大したとの見解が、県内での推論である。
2. 瀬戸内海の広島県の島嶼や岡山県の島嶼でのアサマイチモンジの分布状況は果たしてどうなのか。今後、島嶼を越えて四国に分布を拡大するのか。もしその様な場合、どの県のどの島になるのか非常に関心が集まる事項と考えられる。

■ 県内の西限域はなぜこの様になっているのか。

- ・ 将来的には県西部や九州・四国へ分布拡大する可能性はあるのか？
- ・ 山口県の地質概要図から見ると、AI ラインから東側は火山岩・深成岩・変成岩が主体。西側は堆積岩が目立つ。このことは食草を含め何らかの要因が両種の混成を妨げていることになるのか？ 解明すべき事柄が多く残されている。
- ・ 西側になるほどアサマイチモンジの個体数が少ないことから、交雑も含めイチモンジチョウが優先？
- ・ ウイルスや天敵の問題、イチモンジチョウが優先のためアサマイチモンジが分布拡大できない？

■ 将来アサマイチモンジは山口県を越えるのか

- ・ イチモンジチョウとアサマイチモンジが同一比率 (境界域側で棲息密度が 5:5) になった場合、将来的に後者の分布拡大 (AI ラインを越えて四国・九州を含め) が始まる可能性は？

■ 今後の課題

考えている事柄について、更に裏付けのともなうデータの蓄積を図ることを当面の目的とした。

生態写真



イチモンジチョウ♂



アサマイチモンジ♂



アサマイチモンジ♀

山口県のギフチョウ採集自粛のお願い

山口むしの会保全委員会

山口むしの会では、山口県のギフチョウが危機的状況にあるとの認識に達し、全国同好の皆様にご協力いただき、2013年春から無期限で、山口県内での卵から成虫に至る全ステージ、およびカンアオイ類の採集自粛をお願いすることとしました。

本県のギフチョウは、以前はそれほど珍しい種ではありませんでしたが、自然環境の人為的改変や植生遷移が進み、最近では地域ぐるみで生息環境の保全活動に乗り出している一部地区を除いて、個体数が激減し、かつての多産地でもめったに見かけることができなくなりました。

このような状況下で、日本の西限地域という地域特性からか、毎年採集者が殺到して採集圧を加えるとともに、生息地域の住民や保全活動に取り組む方々との摩擦が顕在化しています。

そこで、まずは本県ギフチョウの窮状を訴え、同好諸氏の賢慮に期待して今後の推移を見極めるのが現状では最善と判断したものです。

採集圧のみを抑制しても個体数が回復する保証はありませんし、法的根拠を伴わず採集“自粛”では決定的な拘束力となり得ないことも承知しています。しかし、何の法的権限もないのにこのようなことを皆様に要請せざるを得ない現状をご賢察ください。

やがて個体数の回復が見込める見極めがつけば自粛を解きたいと考えていますので、趣旨をご理解の上ご協力をお願いします。しかし、今後の状況次第では保全活動と法的拘束力を伴った措置をセットで行政に働きかけることになるかもしれないほどの状況にあることもご認識ください。

最後に、山口県のギフチョウは、せっかく来県されても成虫を見ることすら叶わないことも珍しくありません。地元住民が保全活動をしている地域での採集行為はもっての外です。皆様の冷静で賢明な思慮を期待します。

2013年3月吉日
山口むしの会

山口県の本チグロトゲエダシヤクの話（その2）

渡邊 一雄（広島県）

前半で、われわれ虫屋が日常やっている営みは「種の生物学」というべき生物学の重要な基礎分野であることを論じ、後半で山口県の本チグロトゲエダシヤクに関する続報を行った。

I. 虫屋の営みとはなにか？

1) われわれ虫屋は、つまるところ『そんなヤツがなぜそこにいるのか』に徹底的に答える作業を日夜繰り返している。そんなヤツとは、「種」のことで、種とは、形態、行動、適応生理の3点において固有（specific）な、実体である。

2) しかるに、形態は、「見れば判る」ので、学問としてもよく研究されてきた。また、適応生理も「測定すれば判る」ので、研究としてまとめやすくよく研究されてきた。しかるに、行動は難しい。じつはこの「種の固有の行動」を熟知することこそ、よく考えると「観察や採集の原点」なのである。

3) 行動とは、目的論的に云えば、①生殖行動、②摂食行動、③身を守る行動、の3点に分けて理解される。

4) 個人的興味は、野外で種の行動を見るとき、個体群が、散逸と集中による個体群構造の維持（変動を含む）をいかに成し遂げているか、にある。

II. 山口県の本チグロトゲエダシヤクその後

前回報告および「山口のむし(11);3-15」以降、山口県で採集、目撃された本チグロトゲエダシヤクの記録プロット図（図1）を示した。

つぎに、最近、報告された関西地方における本チグロトゲエダシヤクの記録、および、調査の上、発見できなかった不記録地のリストを挙げた。

III. 関西地方の本チグロトゲエダシヤクの調査及び採集記録

1. 三重県（ひやくとりむし No. 345, 2012；中西元男）

2012年5月8日、三重県松阪市井口中町・櫛田川堤防 カラスノエンドウで摂食中（黄色型）

2. 兵庫県（きべりはむし 34(2), 2012；安達誠文）

*赤字分以外はすべて未採集（negative data）

2008年

3. 6. 宝塚市逆瀬川 逆瀬川；3. 10. 伊丹市下河原 猪名川

2009年

2. 16. 尼崎市西昆陽 武庫川；2. 18. 宝塚市 武庫川-逆瀬川合流点；2. 26. 伊丹市下河原 猪名川；

3. 1. 神戸市道場町生野 武庫川；3. 8. 神戸市長尾町宅原 有野川；3. 10. 篠山市 武庫川；

3. 17. 三田市広野 武庫川

2010 年

2. 23. 西宮市甲山町 仁川 ; 2. 24. 西宮市 有馬川 ; 2. 25. 姫路市市川 ; 2. 25. 三木市美囊川 ;

2. 25. 加古川市加古川 3. 8. ; 尼崎市西昆陽 武庫川 ; 3. 11. 同左 ;

3. 12. 美方郡新温泉町井土 岸田川 ; 3. 14. 佐用郡佐用町船越 千種川 ; 3. 16. 尼崎市西昆陽 武庫川 ; 3. 22. 三木市美囊川

2011 年

3. 12. 美方郡新温泉町井上 岸田川 ; 3. 12. 香美町香住区加鹿野 矢田川

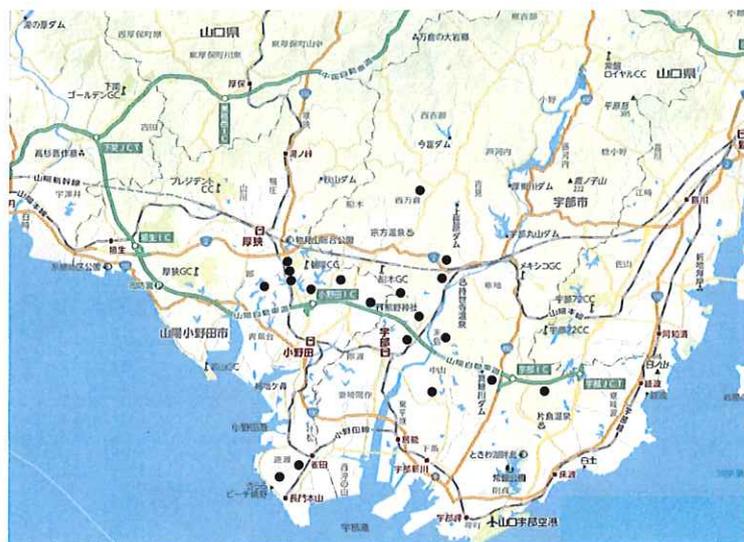
(採集記録)

2010. 3. 12. 美方郡新温泉町井土 岸田川 14♂安達誠文

2011. 3. 12. 美方郡新温泉町井土 岸田川 5♂安達誠文, 11♂伊藤誠人

(参考) 2001. 3. 20. 美方郡浜坂町藤尾 8♂永幡嘉之 (月刊むし(370):33, 2001)

(図 1) 宇部・山陽小野田市のフチグロトゲエダシャクの分布図



- ・既産地 (2011 年まで) 宇部市;中山・末信・串・棚井・山田, : 山陽小野田市;南浜河内・有帆
- ・新産地 (2012 年度) 宇部市;吉見・西万倉・川上・宇部新都市 : 山陽小野田市;赤崎・郡・杣尻・千崎・高畑

日本鱗翅学会 2012 年評議員会情報

三宅 誠治（岡山県）

（開催日 3/25@足立区勤労福祉会館 10/27@愛媛大学）

中国支部会員に関係の深いものを紹介します。

会誌「蝶と蛾」の電子化保留

経費削減のために電子化して冊子の廃止を検討していたが、かつての B5 版から A4 版に変更しページ数を少なくしたことで、年間に印刷費用が約 120 万円軽減された。そこで、早急に冊子を廃止する必要はないとされ、現状の会誌発行を維持することとなった。（3/25）

支部助成金

中国支部への 2012 年度支部助成金は、要求通り（39,650 円）が承認された。（3/25）

調査活動を示す腕章の作成

次世代を担う人材育成の一助とするため、また鱗翅学会の認知度を高めるために、「学会に係わる者が調査活動を行っている」との立場を明示し周囲の理解が得られ易くすることが目的。腕章は、50 枚を作成し、採集会や観察会等の際に申請に基づき貸与される。2012 年は、東海と信越で試行しその効果を検証する。信越支部の長野県での調査に参加した子供達 17 人の反応は、調査に一生懸命になれた：9 人（52.9%）、格好良く感じた：2 人（11.8%）、偉くなったように感じた：1 人（5.9%）、楽しい：1 人（5.9%）、つけなくてもいいと思う：1 人（5.9%）、じゃまに思う：1 人（5.9%）、その他：2 人で、今後また腕章を使ってみたいかの質問には、使用したい：13 人（76.5%）、使用したくない：1 人（5.9%）、どちらでもいい：3 人（17.6%）との回答。（3/25, 10/27）

会費

これまで懸案とされていた会費の値上げについては現状を維持することとなった。また、学会の将来を担う若手会員の加入促進を目的とした会費軽減処置として、25 歳以下の「通称一若手会員」については 2013 年度会費から半額とし、入会金も免除することとなった。なお、年齢は当該年度の 1 月 1 日時点での満年齢とする。（3/25, 10/27）

大会スケジュール

2013 年：第 60 回大会 11 月 9～10 日 大阪府立大学なかもずキャンパス

2014 年：九州 2015 年：中国？ 2016 年：関東？

⇒2015 年は中国地方で開催します。（田村追記）

自然保護委員会

第 9 回自然保護セミナーは、2013 年 10 月 5 日に東大本郷キャンパスにて開催予定。これまで注目されていなかった種で原因がよく分からないままに衰亡する種が出てきたため、第二の絶滅危惧種の増加というテーマを設定。

再導入・保全的導入のあり方について取りまとめを行い、L S J として発信していく。

会員数の変動 2012 年は、10 月下旬時点で 20 人の減少で約 1200 人に。

会計報告

2011年度と2012年度の両年度の会計報告をいたします。

2011年度は諸般の事情で会計報告ができませんでした。今回併せて報告をいたします。

2011年度会計報告

○収入の部

項目	金額	備考
前年度繰越金	125,004	
2011年度支部交付金・活動助成金	50,850	
懇親会おつり	61,400	
預金利子	17	
計	182,271	

○支出の部

項目	金額	備考
支部会報第12号印刷費	51,450	100部印刷
支部会報第12号送料ほか	8,345	原稿, 会報郵送料
例会費等	26,700	
事務消耗備品費	4,290	ハガキ, 封筒, 糊など
雑費	2,730	例会時の写真代
計	103,117	

○2012年度繰越金

182,271円－103,117円＝79,154円

2012年度会計報告

○収入の部

項目	金額	備考
前年度繰越金	79,154	
2012年度支部交付金・活動助成金	50,450	
例会参加費	125,000	会員15名, 非会員5名
預金利子	8	
計	142,112	

○支出の部

項目	金額	備考
支部会報第13号印刷費	57,750	100部印刷
支部会報第13号送料ほか	7,715	原稿, 会報郵送料
例会費等	22,360	ハガキ, 封筒, 糊など
事務消耗備品費	4,290	
計	92,115	

○2012年度繰越金

142,112円－92,115円＝49,997円

あとがき

例会へ参加された皆様、ご苦労様でした。次回例会への参加をお待ちしています。ようやく支部会報 14 号ができました。早くから原稿をいただいた会員の方には遅くなり申し訳ありませんでした。

次回 15 回例会は、2013 年 11 月に鳥取県立博物館で予定しています。多くの御参加をお待ちしています。この会では、2015 年中国支部で開催を予定しています、全国大会の取組みについて考えたいと思います。

支部会員向け連絡についてですが、経費節約の観点から、できるだけメールで送りたいと思います。アドレスをお持ちの方は、下記事務局へご連絡ください。

体調には十分注意して、ご活躍ください。

寄贈文献

日本鱗翅学会 東北支部 第 1 回例会 講演要旨集

2012 年 11 月に発足した東北支部の例会講演要旨集です。

東北地方のスカシバガについて講演をされています。その他、韓国の蝶、ヒゲナガガ、ドクチョウ、アサマイチモンジについて講演が行われています。

文献紹介

日本昆虫目録第 7 巻鱗翅目（第 1 号 セセリ上科－アゲハ上科）日本昆虫目録編集委員会 編集，日本昆虫学会発行，樺歌書房，3,900 円＋税。

日本で記録のあるチョウ全てが，亜種名を含めて載っています。標本箱を整理するのに便利です。六本脚で取り扱っています。

役員紹介

支部長：田村昭夫

支部幹事：鳥取県；田村昭夫

島根県；淀江賢一郎

岡山県；岡野貴司

広島県；渡邊一雄，神垣健司

山口県；川元 裕

日本鱗翅学会中国支部事務局

〒682-0881

鳥取県倉吉市宮川町 2 丁目 74 番地 田村昭夫

TEL/FAX:0858-22-7707

E-mail:tanbaya@lime.ocn.ne.jp

日本鱗翅学会中国支部会報

第 14 号

発行日：2013 年 10 月 31 日

編集者：田村昭夫

発行者：日本鱗翅学会中国支部

682-0881

鳥取県倉吉市宮川町 2 丁目 74 番地

田村昭夫 方

印刷所：株式会社トライ・エックス

目次

支部長挨拶	1
中国支部第14回例会の報告	2-3
発表要旨	
1. <i>Parnassius</i> 属の分類事始め 大屋厚夫	4-6
2. 台湾採集旅行記 吉田嘉男・若槻匡志	7-12
3. 山口県のイチモンジチョウとアサマイチモンジの分布域について 後藤和夫	13-16
4. 山口県のギフチョウ採集自粛のお願い 山口むしの会保全委員会	16
5. 山口県のフチグロトゲエダシャクの話(その2) 渡邊一雄	17-18
6. 日本鱗翅学会2012年評議員会情報 三宅誠治	19
会計報告	
田村昭夫	20
あとがき	表紙 3
日本鱗翅学会中国支部規約	表紙 2

<表紙写真>

1988年、月刊むし社からの依頼で「世界の重要昆虫シリーズ、*Parnassius* 属の地理的変異と個体変異」の第1巻を出版した。次の第2巻にとりかかった時、出版社に巨大な赤紋の *nomion* が持ち込まれた。新亜種であることは誰が見ても分かるような代物であった。第2巻は運よく「*nomion*」だったので、早急に記載文を書いてほしいということであった。命名記載は関係者と相談して「*koiwayai*」にした。真っ赤なノミオンといえば、憧れの大珍品 *Parnassius nomion richthofen* (本文図示) を指していたが、*koiwayai* は「イチゴノミオン」という異名がついたという。(大屋厚夫)